

京まち工房



SPRING
情報交流誌

no.

10

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

地域と共生する土地利用の基本構想まとまる



中京区の旧京都ガス跡地(柳馬場通姉小路下)を対象に、住民と企業が協働して土地利用の検討を進めてきた「地域共生の土地利用検討会」(注)において、基本構想として今後の都心部のまちづくりに向けて求められる施設の機能がまとまりました。

検討会では「住む人のまちに対する思い」「まちの資源・個性」を確認・共有し、まちの将来像を具体的に描き、これを踏まえて地域と共生する施設を検討してきました。

そして、都心居住機能、地域産業支援機能、地域文化発信機能、そしてこれらをつなぐ交流機能が備わる複合機能の施設を整備することを確認しました。

今後はこの成果をもとに、これまで地元で取り組んできたまちづくり活動をさらに充実し、パートナーシップの精神で施設の具体的な計画づくりを進めていきます。

(注) 地域共生の土地利用検討会

地権者、学識経験者、地元町内会、市民活動グループ、まちづくりアドバイザー、景観・まちづくりセンターで構成され、これまでに8回開催。ワークショップや意見交換を通じ、まちの良いところや新しい流れ、まちの将来像について確認・共有し、まちづくりの一環として土地利用を検討してきました。

(「京まち工房」第7号参照。本号2ページにも関連記事を掲載)

京都の都心における、 地域と共生する土地利用に向けて

京都の都心部は、文化や芸術、人、ものが交流する職住共存のまちとして、古くからにぎわいがありました。また京都のなりわいとしての特徴で生活と産業、地域の間には密接な関係があり、商いを円滑に進め、豊かに暮らしていくために、自分たちで生活のルールを決め、運営する仕組みが整っていたと言われています。

しかし今日では、地域産業の形態や生活スタイルの変化、少子化や高齢化などにより都心の活力の低下が懸念されています。また、その建設過程や入居後の地域コミュニティとの調整・調和が困難な

マンション問題が多く地域でみられるなど、誇りを持ち安心して住み続けていく上での多くの課題が生じています。

「地域共生の土地利用検討会」は、これらの課題に対し、地域で取り組まれているまちづくり活動と地権者(企業)の目的を同じ土俵で考え、まちづくりの観点から、土地利用を検討する全国初の試みです。

今回の検討会では都心部、特にこの地域の特徴をさらに伸長していく複合機能を備えた施設を建設することが確認されましたが、今後様々な地域で同様の取組が進められ、それぞれの地域の個性を活かし、地域と共生する土地利用を実現していく仕組みを整備することが課題となっています。

あなたのまちづくり拝見

姉小路界隈を考える会

～都心の資源(人・もの)を活かし、将来へ継承するまちづくり活動～

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するコーナー。今回は、都心に息づく昔ながらの町並みや豊かな人材を活かしたまちづくりを展開し、またその取組の一環として、地域共生の土地利用検討会に参画している「姉小路界隈を考える会」の取組を紹介します。

都心に息づく昔ながらの町並みと豊かな人材

御池通の一筋南の姉小路通は、古くからのなりわいが今も多く継承されています。数多くの老舗、味わいのある看板、町家を改修したギャラリーなど、歩いてみると発見できる数多くの魅力があります。「姉小路界隈を考える会」は、この姉小路通(おおよそ東西は烏丸通～河原町通の間)を舞台に、様々なまちづくり活動を展開しています。

マンション建設計画を契機とするまちづくり活動

「姉小路界隈を考える会」のまちづくり活動のきっかけは、マンション建設に対する反対運動でした。



会報「姉小路界隈ヨリ」

平成7年、中京区柳馬場通姉小路下る油屋町の土地(約350坪)において、11階建て分譲マンション建設の計画

が発表されました。ここは旧京都ガスの発祥の地であり、一時期、敷地の一部が広場として地域に開放されていたこともあり、周辺の住民に長く親しまれてきた場所でもありました。地域住民は、「コミュニティと景観を壊すマンション建設ではなく、町の活性化につながる事業」を目指し、活動が展開されました。あわせて、専門家から次のステップを考えた取組の提案を受け、他地区での取組の学習や、地域を見直す勉強会が始められました。その結果、参加者の中で、人のつながりを大切にしたいまちづくり活動への共通の認識が得られ、同年11月に「姉小路界隈を考える会」が発足しました。

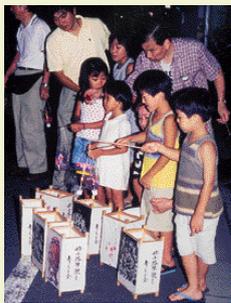
会の名称には限られた地区だけでなく、広がりのある活動を目指して、「界隈」を名称に入れるとともに、他の多くの取組の学習から「ゆるやかにまちを見つめ、まちへの愛着や思い入れを相互に確認し、いいものならみんなで残して、それに調和したまちづくりを進めていく」といったゆったりとした活動を展開していくことが確認されました。

反対運動と会のまちづくり活動が同時に動き出していた、翌年3月に、マンション計画の見直しが発表され、まちづくりを中心に活動が進んでいきました。

人のつながりが新たなつながりを生み出すまちづくり活動

会の活動は、界隈に点在する老舗の看板の再発見からスタートしました。また、都心で人のつながりをもっと深め、まちの魅力を住民相互で確認・共有することを目的とし、まちの文化財ともいえる職人や老舗の主人に話を聞く「姉小路にんげんマップ」を始めました。会の様々な活動内容は会報で紹介され、現在17号まで発行されています。

会の活動の特徴は様々な学識経験者や学生、まちづくり団体との交流の中から、界隈に合った活動を発見し、地域の人が協力して実践することで、「灯りでもてなす姉小路界隈」



地藏盆の時には、行灯を並べるイベントが行われています

「花と緑でもてなす姉小路界隈」へと広がり、継続しています。地藏盆と大晦日に行灯を並べ、まちかどコンサートを開催したり、伝統を大事にしながら進取のスタイルをとる京都らしいまちづくり

活動を展開しています。

このような地道な取組の成果により、会員は設立時の約80名が現在では倍増しています。また、平成9年度から、地域のまちづくり活動を支援する「京都市まちなみデザイン推進事業」により、会の運営費の補助を受けています。

地域と共生する土地利用検討会



検討会で開催したワークショップの様子

平成10年の春には、前述の油屋町の土地を所有する事業者から「将来にわたって地域に愛される施設を建設したい」と、地元との意見交換の仲介が景観・まちづくりセンターに依頼されました。そして平成11年1月に、姉小路界隈を考える会をはじめ、京の三条まちづくり協議会、周辺町内会、そして学識経験者として京都大学の

高田光雄助教授をメンバーとして、地域共生の土地利用検討会が発足しました。

このような取組は全国的に例がなく、住民と事業者を結ぶパートナーシップのまちづくりの先駆的なモデルとなっています(1ページ参照)。

まだまだ続きます、都心部のまちづくり

京都の都心部は、職住共存のまちとして、そして文化や芸術、様々な人・ものの交流の拠点として、にぎわい、そして新たな文化が創出・発信されてきました。現在の町衆とも言える姉小路界隈を考える会のメンバーによって、今後も新しい京都文化が創出・発信されていくことが期待されます。

姉小路界隈を考える会・ホームページ
http://www.ane.cup.com/

姉小路界隈を考える会会長 市古和弘さん



「京都市まちなみデザイン推進事業」にハードの面のみならず、ソフトの面を重視した活動を認められ、補助の対象となったことに感謝をしています。

最近になり、油屋町跡地の取組と並行してNTTの遊休地に商業施設建設が浮上してきましたが、数軒の北側の優れた老舗と界隈の西の入口にふさわしい環境を求め、資料の提供と提言をしています。町並みは少しずつ変化をしていくものであると考えますが、住む人々の心の安泰と満足感を満たせるよう運動を進めていきたいと思っています。

まちづくりアドバイザー 石本幸良さん



会とのお付き合いももう4年になりました。アドバイザー役を越えて会員として活動に参加しています。この会の大きな特徴は既存の組織に基盤を置かず、地域の有志が150世帯も参加している点で、ゆったりとした、地域の人自らが楽しめる活動を通じて人のつながりがさらに広がっていくことです。

会の活動は界隈から都心に広がりつつあり、「地域共生の土地利用検討会」も都心再生の新たな取組として注目されています。都心で起こっている様々な問題の発生要因と解決法の一画を示唆する活動と言えます。

お知恵拝借～

- 地域に密着したまちづくりグループ -
やなか
谷中学校

今回のこのコーナーは、古き良き東京の雰囲気を色濃く残す谷中で、地域住民と谷中を愛するグループが一体となって様々なまちづくり活動を展開している「谷中学校」からお知恵を拝借します。

東京都台東区谷中は、江戸時代以来の寺町で、震災・戦災を免れた地区では明治から昭和初期の建物が所々に残り、幅員の広くない道路に植木鉢が並べられた玄間まわり、さりげなく置かれた縁台の将棋セット、猫...と下町の雰囲気が漂うまちです。

谷中を愛する人たちの試み・谷中学校

まちづくりグループ谷中学校は、バブル経済と共に地域性喪失の危機感が高まる中、昭和61年に地域のグループや個人が研究会を結成し、「谷中根津千駄木の親しまれる環境調査」を行い、まちづくりに関する人とのネットワークが形成されたことに始まります。その後平成元年に研究会でまちの人と共に建物や路地の調査を行った成果の展示と座談会を機に、有志(都市・建築デザインの専門家、大工、台東区職員等約20名)が集まって谷中のまちに学んだことをまちに返していくという趣旨のもと「谷中学校」が結成されました。

現在の構成は事務局5名、運営委員29名、一般会員が全国で223名、後見人39名です。

谷中学校の目標は、谷中の生活文化を引き継ぎ、生み出すこと、そして、そのために自分のまちのことは自分で決める体制を支援すること、の2点です。活動の拠点は、平成元年、取り壊し計画のあった明治期の町家を、家主と相談して後部のみ建て替え、前の商家部分を保全することで合意。うち1階表部分を谷中学校の拠点として借り受け改修しました(「平成7年度台東区まちかど景観コンクール」でまちかど賞を受賞)。

その後これを契機に、谷中学校では界隈の建物の増改築の相談を受けてきました。また行政課題の検討として「台東区下町型住宅のあり方調査(平成4～6年)に参画し、住環境の基礎調査と下町にふさわしい住まい方のガイドラインを作成しました。

その後谷中に関心の深い設計者・プランナーや地域の工務店等とのネットワークを発展させるため、平成10年「谷中学校・まちとすまいの相談室」が開設され、下町型住宅の新築設計も行ってきました。

平成3年から毎年10月半ばには、谷中に住もう人のまちづくり学習

と文化振興を目的とする活動として「谷中芸工展」を実施。谷中界隈を展示会場とし、伝統工芸職人の店やギャラリーなどを地図で紹介し、芸術・職人文化を再発見する催しで、まちの人がまちを歩いて楽しむイベントを行っています。



谷中学校と事務局のみなさん

谷中学校代表の手嶋尚人さんは「谷中の人は、人と人との関係、信頼関係をとても大事にします。この10年間はまさに『信頼関係』を得るために頑張ってきました。谷中学校は、地域に開かれた寄り合いの拠点を目指しています」と話されています。

マンション問題からまちづくり活動へ

このように古き良き下町の雰囲気が残り、そして専門家と住民が一体となってまちづくりを展開してきた矢先、平成10年9月に9階建てのマンション建設の計画が持ち上がりました。

そこで地域住民と谷中学校は「谷中のまちづくりを考える会」を組織し、単なる建設反対運動ではなく、下町谷中にふさわしいマンションを建設するため、事業者と話し合いを重ねました。具体的なプラン等の提示は専門家集団である谷中学校のメンバーが、事業者との窓口に立ちました。これは10年近く地域と共にまちづくり活動を展開してきたことによる、信頼関係があって可能となったものです。

それぞれの地域には、重層的なまちの人間関係や、建物の建て方など「暗黙のルール」があります。谷中学校ではこれら共通認識を言葉として表現し、新しいマンションにおいてもこれを実現できるよう試行錯誤を重ねました。

その結果、通りからの景観に配慮した、表部分は4階、全体で6階建てに計画変更が行われ、谷中に似合った意匠の検討、外構・植栽のデザインなど、今年10月の竣工に向けて検討が重ねられています。また入居規約として谷中の式目のようなものを設定したり、新規入居者に地域を案内する谷中ツアーなども企画されています。

「環境をみんなで守ろう」ということは総論では賛成されますが、積極的な展開への気運を見付けるのはなかなか難しいものです。具体的に動くには何らかのきっかけが必要で、また生活に何らかの負担がかかることにもなりかねません。しかし谷中では、このマンション建設計画を契機として、個人の問題をまちの課題として考えるようになり、谷中全体を考えるまちづくりが動き始めました。

今後は、お寺や町内、各種グループの連携体制のもと、より広範なまちづくりを目指して検討が行われていきます。

京のまちの今昔物語

「京のまちの今昔物語」では皆さんがお持ちの昔の写真の切り口にして、現在の京都の問題点を再確認できたらと思います。皆さんもお宅のアルバムの古い写真を探し出してぜひ投稿してください。



コメントは西陣にお住まいの伊藤竜也さんから頂きました。写真は伊藤さんのお父さんが生前に撮影されたものです。

京都駅から見る古いまち並みの一コマ。スッキリしているが、何かしら新鮮さと暖かみを感じられる。



現在の京都駅前

第5号から第8号までの、「京のまちの今昔物語」にお写真とコメントをお寄せいただいた写真家の松尾弘子さんが、この度写真集「京・西陣(淡交社刊)」を出版されました。まち・ひと・くらしと、松尾さんが長年に渡り撮り続けた西陣の様々な表情が集められ、いつまでも伝えていきたい、伝わって欲しいと感じられる作品集です。



みつけた!

京都のまちの新しい“^{たからもの}資源”

～景観・まちづくりコンクール
「京都景観・まちづくり賞」作品展示会を開催しました～

今年度から隔年で実施している景観・まちづくりコンクールの作品募集(昨年11月24日～12月24日)に、「京都景観・まちづくり賞」64作品、「くらしの景観・まちづくり賞」32作品の応募がありました。

様々な色や形、構造や意匠の工夫が凝らされた建造物や創造性あふれるまちづくりの取組など景観・まちづくりへの思いが込められた京都の「新しい資源」が寄せられました。

「京都景観・まちづくり賞」の全応募作品については、作品展示会を1月18日からの13日間、センターで行い、約500名の方々に来場いた



景観・まちづくりコンクール作品展示会の風景

だきました。

コンクールを市民に身近なものとし、景観・まちづくりに関して考える機会の一つになればと設けた自由意見欄には、来場者の方々の作品に対する思いが、280件も寄せられました。伝統的な意匠を継承した作品への評価。新たな景観の創造を提案した作品への評価。さらには、評価が分かれ、まるで意見交換がされているようなものなど。そこには、様々な思いが込められていました。

なお、センターでは、コンクールの入賞作品の表彰・発表と、今後の京都の景観・まちづくりを市民みんなで考えるシンポジウムを以下のとおり開催します。ぜひお越しください。

【景観・まちづくりコンクール表彰式+シンポジウム】

日時 / 4月8日(土) 午後1時30分(開場:1時)

場所 / 元京都市立龍池小学校2階講堂

入場無料

景観・まちづくりコンクールの入賞作品を表彰すると共に、作品を通じて得られた京都らしい景観・まちづくりのあり方について考えるシンポジウム。

会場では、「京都景観・まちづくり賞」と「くらしの景観・まちづくり賞」の入賞作品の展示も合わせて行います。

地域まちづくりセミナー

職住共存地区で新たに開催

昨年上京区で開催した「地域まちづくりセミナー」。今年は、中京区・下京区の職住共存地区にある18学区の中から13学区の地域の方々約30名の参加を得て、2月から3月にかけて5回シリーズで開催しています。このセミナーでは、都心部の課題である「京町家」「マンション」「袋路」を題材として、まちとの関わりや人との関わりをグループごとに考え、これからのまちづくりについて学んでいます。日頃のまちへの想いを出し合ったり、実際にまちを歩き、まちの現状を確認したり、再発見するなど、違う学区の人や専門家との交流を図りながらセミナーを進めています。

また、このセミナーは、ボランティアで参加いただいた17名の専門家によって運営されており、地域の方々の新しい交流が始まっています。地域の価値を共有し、地域の将来像を考えていく取組を地域で主体的に進めていく仕組みづくりを目指して、その第1歩が踏み出されています。



グループ内での意見交換の様子



まち歩きの様子

～21世紀のパートナーシップによるまちづくりに向けて～

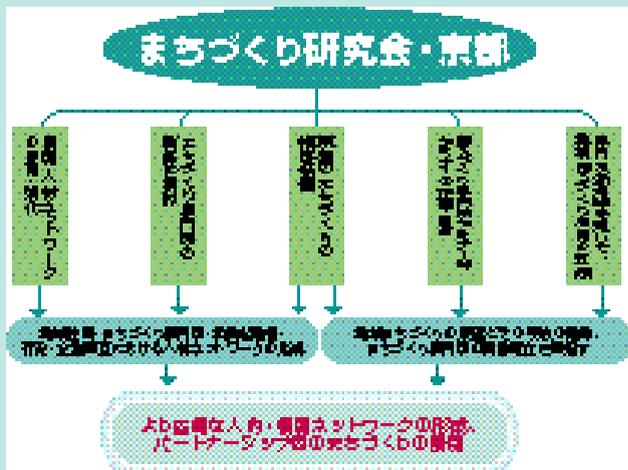
まちづくり研究会・京都

21世紀におけるパートナーシップによるまちづくりの推進に向けて、まちづくり活動と各種専門家の関わり方や、地域まちづくりの主体、リーダーの姿が模索されています。こうした社会の要請に対応していくために、幅広い視野と地域社会への深い理解、地域の自立を促す能力を備えた専門家やリーダー像の検討と、それらの人材を育成するセミナーのカリキュラムと職能のあり方を検討することを目的として「まちづくり研究会・京都」の活動が始まりました。

この研究会は、平成10年度にセンターが、京都のまちづくりを支援する専門家を育成することを目的に開催した「まちづくり専門家実践セミナー」及び地域住民を対象に実施した「地域まちづくりセミナー」の両セミナーをご指導いただいた学識経験者の方々や、それに参加し、運営していただいた経験豊富な専門家の方々合わせて14名の方々の熱い気持ちに支えられています。

これまで委員それぞれのまちづくりへの参加経験から、これからの京都のまちづくりに求められる「まちづくり専門家」像や、互いに必要とされる知識・情報・技能を補完し合い、高め合うためのネットワークづくりに向けて、意見交換を重ねています。

今後は多くのまちづくりに関わる専門家やまちづくりリーダー等との交流・情報交換を重ね、より多角的にセミナーのカリキュラム等について検討し、更なるネットワークの充実を図っていくこととしています。



「京町家まちづくり調査」

京町家の会 ~ 調査報告と意見交換 ~ を開催

約600名の市民ボランティアと多くの市民活動団体や大学研究室などのご協力を得て行った「京町家まちづくり調査」。その後も、調査のリーダーの方々とは今後の京町家の保全・再生の進め方等について話し合ってきましたが、このリーダーの方々を中心に、調査に協力いただいた京町家にお住まいの皆さん



との自由な意見交流を行う「京町家の会」を開催することになりました。この「京町家の会」は、市内をいくつかの地域に分けて、その地域毎に開催していきますが、昨年12月に第1回目をセンターで行いました。

当日は、100名を超える方々に参加をいただき、調査結果の報告の後、少人数のグループに分かれて熱気に包まれた意見交換が行われました。京町家にお住まいの皆さんの様々な悩みや不安、また、それを乗り越えていく努力や工夫などが共有されました。さらには、そうした居住者を支えていく様々な仕組みの必要性、京都のまちづくりのあり方への提案などの意見がありました。

現在、こうした貴重なご意見をもとに、こ



れからの「京町家の会」の進め方と、それらを支援するネットワークのあり方等について検討しているところです。今後できるだけ早い時期に2回目を開催したいと考えていますので、多くの方々のご支援と、京町家にお住まいの方々の多くのご参加をお願いします。

京町家の保全・再生事例

まちなかで福祉サービスを

「聚楽老人デイサービスセンター」

(上京区和泉通中立売上る糸屋町)

上京区に京町家を再生したデイサービスセンターがオープンした。ほとんど手を加えられていない外観。ガラス戸に手を掛けると、なぜか友達の家に遊びに来たような感覚に陥る。一枚板の木彫りの看板が唯一の目印だ。戸を開けると、広めの上がり口にはスロープが設けられていた。

総2階の京町家を、社会福祉法人七野会が原谷こぼしの里のサテライト型デイサービスセンターとして、昨年11月に開所。既存の建物を活用するという、都心部では初の試みである。「上京区でセンターをつくりたい。売りに出されていた築不詳のこの町家にやっとのことで巡り合い、思い切って購入。改修を施した。構造が丈夫で、丁寧に住まれている



たこともあり、新たに建てるよりもずっと安価に抑えられたという。

通り庭は床上げし、フローリングの床が奥まで広がる。1階で畳があるのは表の間の応接室のみ。約80坪の敷地に、表の居間と奥の浴室、静養室がほどよく配され、庭で分離されている。それらをつなぐ廊下は段差をなくし、広がる庭を横目に車椅子でも自由に動き回れる。極力手は加えていない。フローリングと設備の更新の他は柱と壁の補強にとどめ、表、奥ともにある2階の和室はそのままにしてある。以前住んでいた人がここを訪れ、「そのまま残っていてうれしい」と笑顔で帰られた。

1日の定員は15人。上京区在住の利用者に給食・入浴サービスなどが行われる。「毎日来たい」という人もいるぐらい、自分の家のようにくつろげる。まるでホームパーティの様。これからは、その中で少し違った体験、何かを再発見できるような創造的なプログラムの充実を目指す。

開所に合わせ、ピラを配り地域に公開した。町内会長さんがみんなに案内をしてくれ、何ができるのか気になっていた近所の人々が次々に見学に来た。地域に好意的に受け入れられての幸先の良いスタート。向かいの医院の先生も気軽に立ち寄ってくれる。通りすがりの人が手伝いたいとボランティアに来てく



れたこともある。

「聚楽とは、みんなが集まって楽しむこと」。2階は集会室として地域の人に使って欲しい。いろんな人がふらっと立ち寄る。人が人を呼んでどんどん広がっていったら…。センター長代理の河野さんが目を輝かせる。

京町家を活用することで、木の温もりにも包まれたまちなかの福祉施設が利用できる。馴染みのまちで過ごす安心感はここからも生まれるかもしれない。

お問い合わせ

TEL : 075-417-4388

「只今ボランティア募集中。気軽に遊びに来てください」とのこと。



『まちづくり交流』

京滋マンション管理対策協議会

新しい居住形態、コミュニティ形態として注目され発展してきた分譲マンション。ここでは、居住資産を共有する人々が、管理組合員として、日々様々な管理、コミュニティ活動に取り組んでいます。「マンションは管理を買え」とまで言われるくらい、マンションにとって管理の問題はまさに生命線。今回はそのマンション管理に、長年ネットワークで取り組んでいる「京滋マンション管理対策協議会」の活動を紹介します。

賢い管理組合を目指して

京都・滋賀の分譲マンション管理組合の連合体として、1981年12月に発足した京滋マンション管理対策協議会。当初17のマンションでスタートしましたが、現在184のマンション(20,710戸)が加盟しています。「賢い管理組合になってもらおう」を基本理念に、管理組合同士の情報交換、経験交流を深めるための教育・研修活動に取り組んでいます。

当初はマンションの欠陥問題が大きなテーマでしたが、最近はそういった告発型、問題指摘型から、自分たちがここに住み続けるためにいかに良い管理を行っていくかという方向に変わってきたそうです。そのためには修繕等を行う業者との連携が大切ということで、同協議会でも修繕業者等にいい仕事をしてもらえるような条件づくりに取り組んでいます。例えば、大規模修繕等を行う際に、業者や工事の仕様等をすべて管理組合自らが決めていく「自己決定・自己責任の原則」を重視し、そのことを業者にも十分理解してもらうために、管理組合と業者と一緒に参加する勉強会や工事見学会を開催しています。また、マンション問題の解決には専門的な知識が必要とされる点から、会員を対象に法律、建築等のコンサルタントがアドバイスを行う制度も設けています。



実際の改修施工現場を見ることができる工事見学会

情報の受発信機能の強化に向けて

京滋マンション管理対策協議会では、91年から8年間にわたり、住情報の交流拠点「ハウ・メッセ京都」のマンションコーナーを運営し、情報の受発信を行ってききましたが、昨年9月に「マンションセンター京都」を、事務局が入居するビル内にオープンしました。

このマンションセンターには、情報端末、ビデオライブラリー、書籍・資料や会員マンション情報を備えたインフォメーションルームやセミナールームがあり、マンション管理講座・木曜セミナーやマンション居住者による展覧会など独自の企画も行われています。また、ホームページを開設し、管理・修繕を行う企業情報等も発信しているほか、Eメールによる相談にも応じています。また、中古マンションの買い手にもより分かりやすい情報をとすることで、各マンションの物件紹介と合わせて管理やコミュニティについて居住者による生の情報を掲載した「マンションガイドブック」も発行しています。



マンションセンター京都・インフォメーションルーム

マンション管理におけるNPOの役割の重要性

全国的にもマンション管理に対する問題が注目され、管理組合の強化に向けて、各自治体も施策づくりに取り組んでいく方向にあります。同協議会では大阪市のマンション相談マニュアルを監

修したという実績もあり、今後もNPO、行政、企業の連携を重視しています。「住まいやマンション管理に関することは本来営利目的とは矛盾するもので、まさにNPOが担うべき事業です。そしてそれを行政が支援するという形が理想です」と同協議会事務局長の谷垣千秋さんは、行政との連携の必要性を訴えます。

今後は、京都市内でマンションが集中しているような地域で、組合をリタイアした人たちの経験、知識を生かし、NPOによるマンションの共同管理システムが構想されています。その前提として、一定の研修、試験を通った人に資格を与え、地域の管理の担い手になってもらう制度が計画されています。

管理組合の高い自治能力をまちづくりに生かす

「歴史的なコミュニティの違いもあるのですが、京都は他の都市に比べて管理組合の活動が非常に熱心で、今後、マンションがその地域のまちづくりのセンター的な役割を担っていく存在になると思います。すでにマンションの集会室をデイスターに開放されているというところもありますが、特にこれから高齢化社会の中での福祉サービスという点から、管理組合のいろいろな自治能力あるいはマンションの施設、居住者というマンパワーそのものが地域に活用してもらえらると思います。それが一番自然にマンションと周辺の地域が一体となっていくテーマではないでしょうか。管理組合の皆さんが身に付けてきた様々な事業能力、合意形成のノウハウ等をいかに地域のまちづくりに生かしていくかという点で、景観・まちづくりセンターとも連携できたらと考えています」と谷垣さん。

地域まちづくりの推進に果たすマンションの役割への期待が高まりつつある今、マンション管理に関する市民、企業、行政の橋渡し役として、京滋マンション管理対策協議会の活動が目立ちます。

お問い合わせ

京滋マンション管理対策協議会事務局
マンションセンター京都
京都市下京区松原通高倉東入ル三洋ビル304
TEL: 075-351-7421
FAX: 075-371-1564
E-mail: mc-kyoto@land.linkclub.or.jp
ホームページ: <http://www.1.linkclub.or.jp/> mc-kyoto/

まちづくり提案

日本建築家協会近畿支部京都(JIA京都)

～「安らぎのすまい・いきいきまちづくり分校」をスタート～

建築家の資質の向上や建築文化の創造・発展に貢献することを目的に、1987年に設立された日本建築家協会。その京都支部となるJIA京都では、これまで建築に関する様々な相談に応じる京都建築相談室の開設や、弁護士を交えた欠陥住宅京都ネットへの参加などの取組を行ってまいりましたが、今年1月から新たに「安らぎのすまい・いきいきまちづくり分校」をスタートさせました。

「以前から、市民と建築家との接点を増やそうと取り組んでまいりましたが、単なる相談だけで

なく、建築家からも積極的に情報を発信し、市民の方から意見をいただく、双方向のセミナーを行いたいという構想を持っていました」とJIA京都広報委員長の奥田敦さんは語ります。

第1回は一般市民の参加を得て「素材としての土と建築」をテーマに、左官職人の浅原雄三氏から、自然素材へのこだわり、先人の見事な仕事、施主と職人との信頼関係の大切さについてお話がありました。また、最近の建築現場が防護シートで覆われていることに対して、子供がその様子を見ることにより興味を持てるようにする、後継者を育てるという視点からも、大切ではないかという意見もあり、設計には関わらないもの、ずっと現場にいるわけではない建築家や一般の市民にとって、興味深い内容でした。今後、この「安らぎのすまい・いきいきまちづくり分校」は、2ヶ月に一度の割合で開催される予定です。

「一人の建築家として個人の家を設計する場



合でも、実際にはなかなか難しいことが多いのですが、こうして、建築家と居住者である市民が自由に意見を交わすことにより、まち全体を考えた家づくりに目を向けるきっかけになればと思っています」と奥田さん。

こうした取組を重ねることにより、そのまちに調和した、まちの財産となるような建物が増えることが期待されます。

第2回安らぎのすまい・いきいきまちづくり分校

日時：平成12年3月29日(水)

午後7時～9時

場所：景観・まちづくりセンター会議室

テーマ：「京都の木で家を造る」

参加無料

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階の新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

伊藤平株式会社
代表取締役社長 伊藤 淳氏

「伊藤平」ではどんなことを されているのですか？

織物を製造する工程の中で、絵師の描いた図柄をいったん織物用の方眼紙に書き写し、さらにそれを元に織機を制御するための紋紙(1)を作成することを紋処理といいますが、以前からこの工程をコンピューターで処理し、紋紙を使わないで織機を制御することによって、大幅なコスト削減、時間短縮を可能にできました。



弊社ではもっと発想を変えて、デザイナーがコンピューターで描いた意匠を、呉服に限らずあらゆる分野の織物製造用の意匠図にデジタル化するソフトウェアを開発したのです。このことにより、デザイナーと織物製造者が、製造する前段階で織り上がった状態を一緒に検討し、デザインの修正などを行うことができるようになりました。さらに、このソフトウェアでは、織り上げる密度(経糸と緯糸の本数の密度)を自在に設定できるので、製造コストと製品の品質の比較検討もできるようになりました。

現在は、インターネットなどを活用し、その普及に努めているところです。

きっかけは何ですか？またなぜ京都に？

私が会社の暖簾を継いだのは今から10年前で、既に着物が売れなくなってきた頃でした。もともと呉服屋の仕組みというのがあまり好

きではなかったのですが、唐織物(2)の美しさに興味を持っていましたので、唐織の技法を用いた新たな商品を企画・開発しようと考えました。

しかし、唐織は非常に複雑で、紋紙に掛かる費用も高くて困っていました。これを何とかしたいという思いから始まって、従前のコンピューター紋処理機を購入し、紋処理の仕組みを勉強し、デジタル化にたどり着いたのです。

「伊藤平」は私で5代目になりますが、京都で創業した西陣織の間屋でした。父の代に東京に移り、東京で織物の小売りをしていましたが、私が後を継ぎ5年ほど経った頃京都に戻って来ました。初代の頃は相当大きかったことが昔の長者番付を見ると分かります。

ある程度データができ、機が動かせるようになってきたのですが、今度は機が無いと話にならないということになりました。そうすれば、「伊藤平」の地盤がある京都だ、ということになりました。

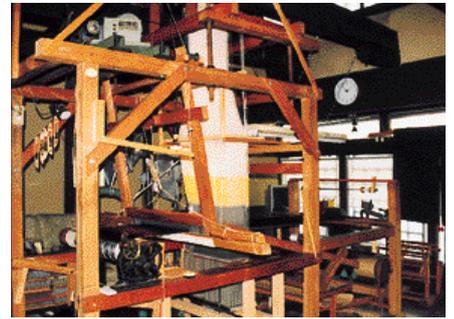
伝統工芸というデジタル化、 機械化にはなじまないのでは？

伝統というのは、今までやってきたことをそのまま続けることではないと思っていますので、どんどん新しいことをやっていけばいい。ただ、なぜ今までそれを続けてきたのかということは、きちんと理解しないとイケませんが。

機械で織るより手織の方が価値があるというのが一般的な見解になっていますが、デジタル化という意味では、紋紙は理論的にはデジタル化されているもので、それを電子情報化したに過ぎません。また、うちの取引先の織元さんでは、手織と動力織機を使っていますが、動力織機を使っても、手織と同じように手間を掛け丁寧に織っています。どんな道具を使っても、いい物をつくれればいいじゃないか、という姿勢でやっています。



1階中の間を事務室として利用



試作品製織のため、2階の床を取り除き設置された織機

あとは機械の進歩で、手織と同じ風合いを出せるようになれば、さらに差はなくなっていくのではないのでしょうか。

今後の抱負をお聞かせください。

今は京都を拠点に活動していますが、今後は東京にも拠点をつくり展開していきたいと思っています。

そのためには、インターネット等を活用して織物の作業工程や、唐織物の美しさをどんどん発信し、興味を持ってもらいたい、そして本物の世界を見て欲しいと思っています。

京都に来て分かったことですが、京都にはすごいものや情報がまちのあちこちにあります。そうした情報を積極的に発信していくことが、京都がますます発展していくことにつながるのではないのでしょうか。

「伊藤平株式会社」ホームページ
<http://www.itohei.com/>

1紋紙(もんがみ)

短冊状のボール紙に穴を開けることにより、織物の図柄を織り出すための製織情報が記録されたもの。編み糸により連結され、すだれ状になっている。

唐織物の場合、その文様や織組織の複雑さから、紙数が数千枚から1万枚を超えるものもある。

2唐織物(からおりもの)

室町時代後期に、中国から伝わった織物の総称。一見刺繍のように浮きよって見えるのが特徴で、現在は、主に能装束や帯などに使用されている。

《センター解説アワー》

地方自治法の改正(地方分権の推進)とまちづくり

1999年7月の地方自治法の改正(施行は2000年4月)は、地方分権を推進するために制定された95年の地方分権推進法と、それに基づく地方分権推進委員会の勧告を踏まえて実施されました。

本改正では、地方自治体を「地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を担うもの」として定義し、機関委任事務()を廃止して、国と地方自治体、都道府県と市区町村の行政面での対等原則を定め、住民に身近な地方自治体への権限の委譲、地方自治体の自主組織権の尊重、行政改革の推進や地方議会の活性化等についての見直しが行われました。

国からの財源委譲等地方の財政改革が残されている点で、十分に満足できる内容にはなっていませんが、地方自治体による「自己責任」と「自己決定」に基づく地域づくりの方向付けが行われたことは、分権への第一歩として、極めて大きな意義を持っていると評価できます。

これは、国による画一的な基準による対応から各々の地域が特色を生かしたまちづくりを展開する時代に入ったことを意味し、それは、単に国と地方行政との関係の変革だけでなく、地域の住民の意思に基づき、自治体自らの判断で、個性あふれる豊かな地域社会の形成を目指すものであり、これを実効あるものにしていくためには、より一層の市民参加による自治体運営が重要になります。

一方、環境、福祉、地域のまちづくりなど、これまで公的な領域における公的な問題とされてきたものが、地域住民の主体的な活動や、様々な課題をテーマとする自発的な市民団体や多様なネットワークによって取り組まれています。

市民には、行政の施策に対して、意見を表明し、計画策定に参画し、監視するという役割と共に、公的な領域において、市民自らが自らのニーズを達成していくといったような取組等が、

これまで以上に重要になってきます。

行政においては、あらゆる過程でより多くの市民の主体的な参加が得られるような新たな仕組みをつくと共に、市民による主体的な取組等の促進に必要な積極的な支援やそういった取組との連携、協働を図るなど、分権化に向けた政策、制度の改変が求められます。

「自己責任」と「自己決定」に基づく分権型社会の実現に向けて、このようなパートナーシップによるまちづくりの推進が、市民と行政双方にとって取り組むべき重要な課題となっています。

機関委任事務

法律等によって地方自治体の執行機関に国から委任された事務。事務を委任されている地方自治体の機関は、国の下部機関として位置づけられ国の指揮監督を受ける。戸籍・住民登録、外国人登録、統計調査、河川の維持管理等多くの事務がある。

私と京都



京都の職人力

(財)京都市景観・まちづくりセンター評議員
長谷川 和子
 (株)京都放送取締役

どこまでも続く低い家並みと紅殻格子、細い路地、応仁の乱以降500年余りにわたって精緻で雅びな織物を織り続けてきた西陣界隈を、KBS京都へ入社したばかりの今から30年ほど前によく歩いたものだ。路地には機音が響き、繭の臭いがした。そして子供達の遊ぶ元気な声がこだましていた。観光客として、京都市内を囲む三山や神社仏閣、有形無形の文化財などに触れるだけではなく、京都に居住する者しか体験できない何かをこの西陣から学んだ。折しも、大阪万国博覧会が開催され、内外に日本の科学技術力と戦後復興を知らしめた時でもあった。複雑な分業体制によるものづくりを貫き、職住一体による生産システムは「西陣織」を媒介とする人的ネットワークと職人の町を形作り、京都の町特有の奥深さに僅かではあるが触れることが出来た。町工場がひしめきあう静岡県浜松市で育ち、文化や伝統という類にほとんど触れる機会がなかった者にとって、西陣の伝統に畏れおのきなながらも「生きている町」としての魅力を感じて楽しませてもらった。ところが、昨今の西陣からは機音も聞こえず、昔ながらの町並みも一変してしまった。バブルの時代を

経てということも勿論ではあるが、西陣内の変化はもっと早くから始まっていたようだ。職人の高齢化や海外への生産シフト、それを支えた紋紙からコンピューターによる製造への転換などで、職人が西陣を後にしたのだ。2000年という節目の年を迎え、西陣織だけでなく、戦後の日本をリードしてきた企業も体質の改善が求められているが、明治の初めに、いち早くジャガード織機を導入するなどして京都人の先取性を遺憾なく発揮してきた西陣の衰退は心から寂しく思う。

しかし、ベンチャーの時代、知識から知恵の時代を迎え、京都が改めて注目され始めた。京都が排出したハイテク企業経営者の企業哲学や、京都の伝統、文化を支えてきた職人の技と眼力、「職人力」が高く評価されているのだ。京都が育て、磨き上げた人材が21世紀の都市づくりに大きな役割を發揮してくれるのだろう。人生のある時期を都市で過ごし、去っていく、即ち、都市は人生の通過点であり、人は旅行者であるとして「都市ホテル論」がささやかれたことがあるが、また、京都に魅力ある人材が集まってきそうな予感がする。

センター語録

ミハエル・エンデの「モモ」のお話を知っていますか？

主人公のモモはとても不思議な女の子です。ケンカをしている人達も、モモにかかればニコニコ笑顔になります。モモは別に何をやるわけでもありません。ただ、お話を聞いているだけ。ひたすら聞いてあげます。じーっと。今まで言い争っていた2人は、お互いそれぞれのおもいがあるのを知り、顔を見合わせ仲直り。そんな2人を見てモモもニコニコ。そんな場面が物語の中にあります。

熱いおもいがあるから、時にはぶつかることもあります。まちづくりも同じ。「まちを良くしたい」。そのおもいは同じでも、アプローチは人それぞれです。様々な価値観がぶつかり合い、トラブルを引き起こすことも。いろんな人がいて、いろんなものがあるって、いろんな出来事がある。当たり前なことだけど、なかなか納得できないこともあります。

私もあなたもあの人も機嫌良く暮らす。そのために「トラブルをもエネルギーにかえる」。なかなか難しいことだけど、まちづくりのパワーには必要なことなんじゃないかなと、つくづく思う今日この頃です。そんな仲立ちのできるモモみたいにセンターも、いよいよ私自身も成長できるようがんばりたいと思います。

(景観・まちづくりセンター事務局 Y.O.)

おとけお湿布 vol.10



ここ九種学区では毎年3回、独居老人の訪問給食サービスが行われています。

センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成12年度分)

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典] ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
 ・ニュースレターでの活動紹介
 ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年会費]

個人1口: 5千円 団体1口: 5万円

まちづくりフレンズの募集

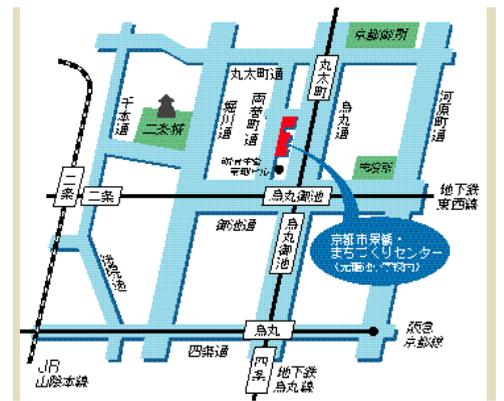
地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

(財)京都市景観・まちづくりセンター「京まち工房」案内



〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452 (元龍池小学校内1階南側)

し えん さんかひつくり

TEL 075-212-4031 (支援・参加・入づくり)

FAX 075-212-4047

e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等

月～金(祝日を除く)9:00～17:00

来所される場合はなるべく事前にお電話ください。なお、駐車場はありませんので地下鉄をご利用ください。

ニュースレター 京まち工房 第10号 2000年3月
 編集・発行 (財)京都市景観・まちづくりセンター
 印刷 日本写真印刷株式会社